

追 想 断 片

佐藤清太さんが広島高師文科第一部に入学したのは、昭和二年春であった。私はその時、同じ文科第一部の三年に在学していた。妙な縁で、佐藤さんとは彼の入学当時から顔を合わせる機会をたびたび持った。佐藤さんの中学時代の恩師がやはり広島高師の出身で、その恩師が、私と同郷のM夫人の家に下宿していた関係で、高師入学の際、そのM夫人を頼って来たとのことであったが、私がM家へ出入りしているうちに、そのことを夫人から聞いた。その頃は、顔を合わせることはあっても、軽く会釈を交す程度で、腰をおろしてゆっくり話し込むようなことはなかった。額の広い、謹厳な秀才型の面ざしの中に、やさしく微笑む目が印象に残っている。

戦後、私が広島に帰って、同じ学部勤務するようになってからは、顔を合わせることも、当然のことながら多くなった。高師・文理大以来専攻して来た漢文学の深い学殖に立って、母校の日本東洋教育史の講座を担当していた佐藤教授の風貌が、初対面の頃のそれと自然に重なって、往時を懐しむ思いが頻りに湧いて来た。

昭和二十年、帝都の空襲が激しくなるにつれ、私が在職していた学習院でも、中等科・高等科を合わせて、疎開の計画が立てられるようになった。私は中等科一年の学生八十名を引率して、同年三月、栃木県日光町に疎開した。終戦を迎えたあとも、その年の十月まで引き続きそこで過した。まだ戦争が苛烈化の一途を辿っている頃であったが、学生を連れて、福島県会津に行軍したことがある。今市を経て、鬼怒川沿いの会津西街道を進み、山王峠を越えて、南会津の田島に至る、四泊五日の行程であった。戊辰戦争の折、官軍の一隊がこの山王峠を越えて、若松の鶴ヶ城に迫った史実を、若い学生たちに話してやったことを思い出す。国をあげて食糧難の時であったが、途中で泊った宿や休憩した寺で、近隣の婦人が総出で、餛ころ餅や握り飯の接待をしてくださったことが、忘れられない。田島に宿泊した時、ふと、佐藤さんの郷里がこの近くではなかつかと、思い出して、大変懐しく思ったことが、今も記憶にあざやかである。

佐藤さんは、大学退官後、会津に帰農したい素志を持っていることを、その口から聞いたことがあるが、永年住み馴れた広島でなく、川越市に晩年の居を卜したのは、郷里との往き来に便だからではないかと付度をしていた。結局は、異郷である川越で最期を迎えることになったようであるが、その霊は、故郷の会津に帰り、安らかな眠りにしていることと思う。

佐藤さんの眼鏡の奥に笑っている、あのやさしい目が今も眼前にはっきり浮んでくる。合掌